

〈書 評〉

地球を救うリサイクル

田中 勝 著

19cm 198頁

清文社

地球といかに共存していくかということ、それは人類の最大のテーマであり、解決目標である。今日、地球という全体を構成する環境問題を考えることは重要なことである。

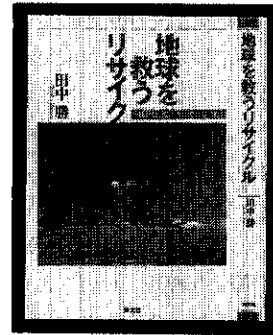
物質的な豊かさは、私たちに幸福をもたらしたと同時に大量消費社会を産みだした。大量消費社会は資源の枯渇を早め、大量のゴミの発生をもたらす。ゴミの問題は深刻さを増し、環境汚染を引き起こし、地球環境破壊の危険性も大きくなってきている。

本書は、現代社会を抱える様々なゴミ問題の解決のために、そのキメ手として、今もっとも注目されている「リサイクル」を中心に、ゴミの発生抑制、適正処理など、取り組むべき緒策を、わが国に於ける廃棄物工学の第一人者である著者が、現状分析等をまじえて、体系だてて説いている必読の一冊であると言える。

本書の内容要旨を示すと、まず、「豊かな生活＝大量のゴミの発生」が地球環境の破壊につながっていて、その解決にはリサイクルが必要であり、ゴミの発生抑制も必要である。その有効な経済的手法として今多くの自治体が検討している有料化制度がある。

減量・リサイクルとともに、散乱防止に役立つデポジット制度、また、ガムやたばこの吸殻の散乱防止にポイ捨て禁止条例を上げ、散乱と不法投棄の防止を唱えている。

加えて、ゴミ対策まで考えた良い商品の開発とその供給、適性処理レベルの決定、リサイクル技術の開発等にも言及している。他のトピックスとして、国際資



献、海外事情、感染性廃棄物、廃プラスチックについても重要なテーマとして取り上げている。

著者は、本書において以下の様に述べている。ゴミ問題は自己矛盾をはらんだ厄介な問題であるので、私たちは分別（ふんべつ）ある生活様式や生活行動をとることが必要である。ゴミ問題を解決するには、ゴミの発生抑制とリサイクル、そして適性処理しかない。

1995年には容器包装リサイクル法も制定され、瓶、缶、プラスチックボトルなどの容器を住民は分別（ふんべつ）して排出し、自治体は分別回収し、事業者は再生利用することが課題になった。自治体は何をどのように分別回収すべきか、市民はいかに分別排出しなければならないか、などの疑問に答えなければならない。

本書のタイトルにあるように「地球を救う」には、私たちの分別ある生活様式と、ゴミの分別によるリサイクルしかないという著書の提言にあるように、本書は、使い捨ての量的な経済成長から、質的な豊かな生活、成熟した社会への転換を訴え、健全な精神に基づいた行動を示唆する有用なものである。是非、ご一読頂きたい。

古市圭治（院長）